〈幼稚園教育〉

豊かな心を育てるための保育実践をめざして

― 幼児一人ひとりが友達とのかかわりの中で育ち合う援助を通して ―

糸満市立潮平幼稚園教諭　上　原　順　子

目　　次

Ⅰ　研究テーマ設定の理由 …… 1

Ⅱ　研究仮説 …… 1

Ⅲ　研究の全体構想図 …… 2

Ⅳ　研究内容 …… 3
　1　一人ひとりの発達を理解する …… 3
　2　援助について …… 3
　3　園生活と豊かな人間関係 …… 3
　4　豊かな心について …… 4

Ⅴ　保育実践 …… 5
　1　活動名 …… 5
　2　活動設定の理由 …… 5
　3　ねらい …… 5
　4　内　容 …… 5
　5　展　開 …… 6
　6　保育の反省 …… 6

Ⅵ　実践事例 …… 7
　1　自分を素直に表現する …… 7
　2　直接体験を積み重ねることの大切さを知る …… 8
　3　ありのままの姿の中からていねいに読みとる …… 8
　4　友達と十分に関わり、友達のやさしさに気付いていく …… 9

Ⅶ　研究の成果と今後の課題 …… 10
　〈参考文献〉

〈幼稚園教育〉

豊かな心を育てるための保育実践をめざして

― 幼児一人ひとりが友達との関わりの中で育ち合う援助を通して ―

糸満市立潮平幼稚園教諭　上　原　順　子

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼児期は、幼児が生涯にわたり人間形成の基礎を培う大事な時期であり、また、心身の発達が著しく環境からの影響を大きくうける時期でもある。幼児をとりまく環境の変化により地域での遊び場が減り、物が豊富になり情報が氾濫する反面、人との関わりが少ないのが現状である。

しかし、社会がどんなに変化しようと人間が人間らしく生きていくためには心情、意欲、態度を身につけ、豊かな人間性を大事にし、自分で課題を見つけ、困難なことに出会っても乗り越えていく粘り強さや他人を思いやる心だと考える。

幼稚園教育目標にも「多様な経験を通じて豊かな感性を育て、創造性を豊かにするようにすること」と述べられている。

幼児は柔らかい素直な心をもっており、見たことや感じたことを、素直に表現することができる。しかし、生活の中で得た感動も周囲から受けとめられないままだと次第に薄れてしまうことが多い。幼稚園教育は、心の育ちに大事な感性の素地作りをしていると言われている。しかし、日々の保育実践を振り返ると子供達が感動している場面や、言葉などに教師がどれだけ気がついていたのか反省するところがある。

幼児の友達関係は、一人ひとりがその子らしさを十分に発揮し、自分の思いを存分に出したという満足感を得ながら友達の存在感や友達と一緒に活動できた喜びを実感することで育っていくと思われる。

園生活での友達と関わる場面をみると、社会背景からくる少子化や地域で遊ぶことも少なくなり、よって、園でも友達とうまく関わることができず、ケンカになったり、また、衝突することを面倒くさく思ったりする幼児も見られるようになってきた。

園の具体目標の項目の一つに「よく遊ぶ子」とある。それは、時間や場が保障され、友達とイメージを共有し、遊びを創りだしていくことである。遊びにじっくり取り組むことで喜びが倍増し、幼稚園生活がより充実したものになると考える。

そこで、教師は一人ひとりの思いや気持ちをていねいに読みとり、友達同志の関わりあう場を支え、つながりが深まっていけるような保育を心がけたいと考える。

しかし、現実は幼児一人ひとりの大事な心の動きを見ているつもりでも見えていなかったり、一方的な思い込みであったり、理解したことを保育に生かしきれない面もあった。

このようなことから、幼児の日々の生活を観察や記録することで、一人ひとりの発達を理解し、友達との中で育っていく過程を捉え、適切な援助をすることによって、豊かな心が育つものだと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　研究仮説

教師が一人ひとりの発達を理解し、適切な援助をすることにより一人ひとりの豊かな心が育ち、さらに友達との関わりも深まることになり、他児に対する豊かな心も育つであろう

Ⅲ　研究全体構想図

幼稚園教育のめざすもの

（生きる力の基礎となる）

心情、意欲、態度を養う

幼稚園教育の目標

1　健康、安全で幸福な生活のため基本的な生活習慣・態度を育て、健全な心身の基礎を培うようにすること。

2　人への愛情や信頼感を育て、自立と協同の態度及び道徳性の芽生えを培うようにすること。

3　自然などの身近な事象への興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うようにすること

4　日常生活の中で言葉への興味や関心を育て、喜んで話したり聞いたりする態度や言葉に対する感覚を養うようにすること。

5　多様な経験を通じて豊かな感性を育て、創造性を豊かにするようにすること。

幼稚園教育の基本

☆環境を通した教育

1　主体的な活動を促し幼児期にふさわしい生活の展開

2　遊びを通しての総合的な教育

3　一人一人の発達の特性に応じた教育

教育課程の編成

教育課程

園の教育目標　・　具体目標

遊びを通して友達と触れ合い、自然と触れ合う中で思いやりのあるやさしい子に育てたい

よく遊ぶ子　　やさしい子　　よく聞く子

幼・家の連携

地域 家庭 園

幼児の実態

研究テーマ

豊かな心を育てるための保育実践をめざして

－幼児一人ひとりが友達との関わりの中で育ち合う援助を通して－

研究仮説

教師が一人ひとりの発達を理解し、適切な援助をすることにより一人ひとりの豊かな心が育ち、さらに友達との関わりも深まることになり、他児に対する豊かな心も育つであろう

教師の適切な援助 →

研究内容

- 一人ひとりの発達の理解について
  発達の特性　　発達を促すもの
- 援助について
- 園生活と豊かな人間関係について
- 豊かな心について

← 保育記録

参考文献

Ⅳ　研究内容

1　一人ひとりの発達を理解する

幼稚園は、十人十色さまざまな子供の集まった集団である。一人ひとりの発達を理解するときに大事なことは、日常生活の中で展開しているありのままの姿から捉えるということである。幼児期は体験を通して発達する。園生活での姿をみると、今までの育った環境や月齢によっても興味、関心や取り組み方にも違いが見られる。どの子もおおよそ一定の筋道を通って発達していくが、発達のペースや方向性は一人ひとり違うということを充分理解するということである。一人ひとり異なる発達そのものが個性的であり、独自性でもあるということである。この個人差の大きい幼児を望ましい方向へ発達を促すには、ある基準にはめるのではなく、幼児の行動の仕方や考え方など内面を捉え、個々の幼児の課題に応じるということである。

(1)　発達の特性

人間は生れながらに成長していく力と、環境と関わり能動的に働ける力をもっている。幼児自ら環境に関わり、伸びようとする芽を育てるための適切な援助をするには、幼児の特性を理解し、発達の実情に即した教育を行なうことが大切である。特性には次の４つがあげられる。

ア　生活経験によって親しんだ具体的なものを手がかりにイメージを形成し、物事を受けとめていく

イ　身体が著しく発達して運動機能が急速に発達していく。

ウ　信頼できる大人や親への依存を基盤にして自立へ向かう。

エ　信頼できる人やあこがれの人の言動や態度を模倣し行動する。

(2)　発達を促すもの

ア　能動性の発揮

興味や関心をもったものに対して自分から関わろうとすることである。能動性が発揮されるには時間や場の保障をしていくことである。幼児を認め、励ます教師の存在の影響を大きく受ける。

イ　発達に応じた環境からの刺激

環境との相互作用によって発達に必要な経験を積み重ね、幼児期の発達は生活している環境の影響を大きく受ける。幼児の興味や関心に応じて必要な刺激が得られるような環境構成をすることである。

2　援助について

保育の営みで大切なことは、保育者と一人ひとりとの子供の間に信頼関係を作りだすことである。人は誰しも他の人からの言葉や表情、態度などから気持ちが和らいだり、力づけられたりするものである

保育において、学級に何人いようが関わりの原点は一対一である。子供の言動や表情から何を感じているのか、何を実現したいと思っているのかを読みとり、自分で課題を乗り越えていくための支えになるものが援助だと考える。教師が先回りして教えたり手助けしたりして思うがままに導くことではない

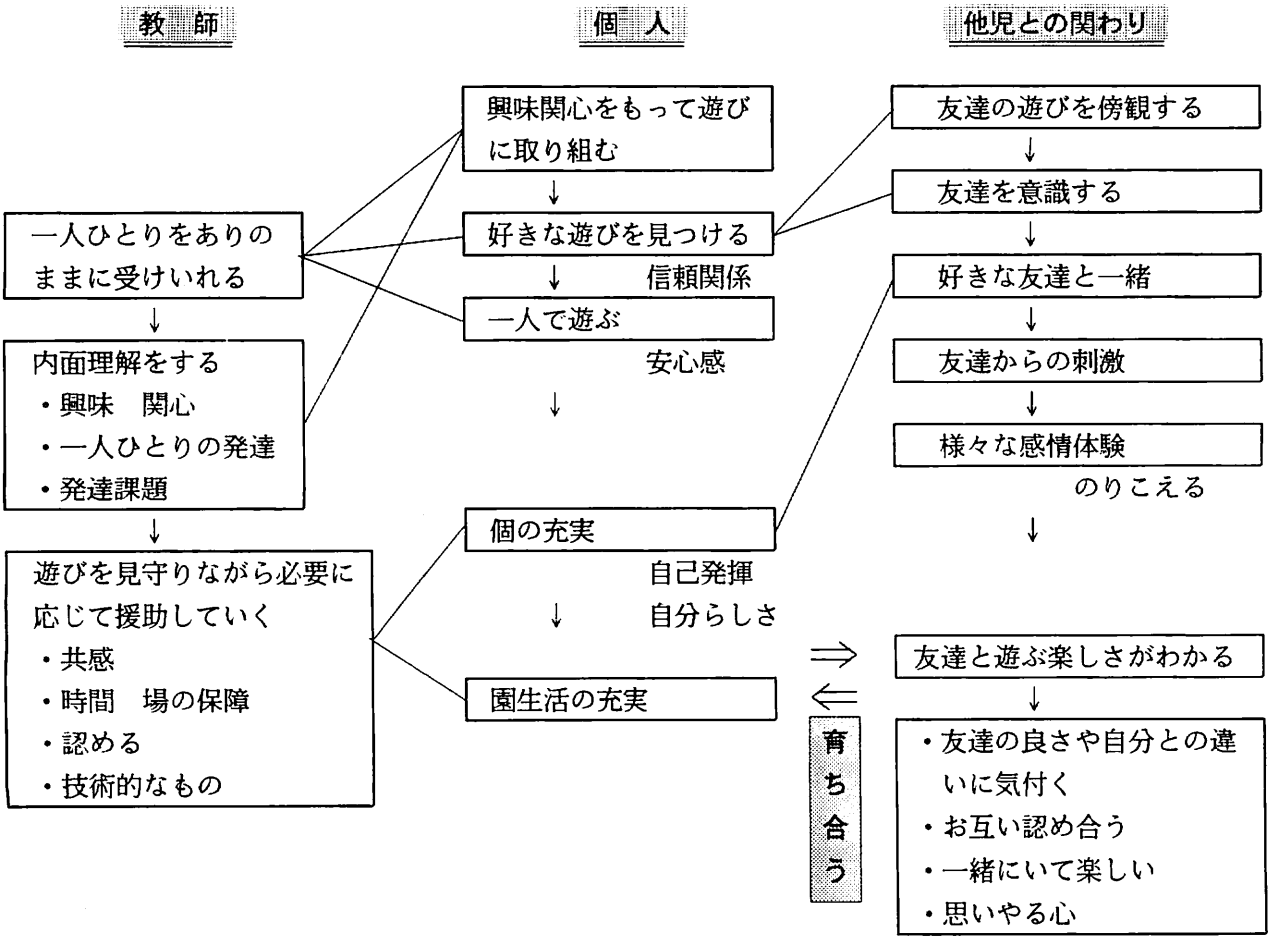
生活の中では「～ができた　～ができない」と結果よりもたどるまでの過程が大事である。過程の中で子供が「はっとする瞬間・自分でやったことなんだ・自分で考える・気付く」と心で受けとめることや、心の動きがないと一人ひとりの育ちにつながりにくいと考える。

援助は結果がよかれと思ってしていることではなく、個々の幼児の課題に意味のあるものになっているかどうか、より充実した方向に向かっているか、子供の気持ちを汲むことを大切にし、育ちを支えることが大事だと考える。

友達との関わりにおいては、自分が受け入れられていることや、友達といる楽しさを味わい、友達に考えがあることを知らせたり、気付かせたりして、関わり合う場を支えていくようにしたいと考える。

3　園生活と豊かな人間関係

(1)　幼稚園がより楽しいものになるには、充実した園生活を過ごす事である。出来た時の喜びや、嬉しさを友達に伝えようとする態度が、人と人との関わりの豊かさを増すものと考える。



4　豊かな心について

生活感情の中にある素朴な人間的願い、感動、価値感情と捉える。心とは人間の知性、知識、感情、意志等の働きの基になるものである。豊かな心の要素として次の５つを考えてみた。

(1)　感　性

幼児期の感性とは、周囲の環境との関わりの中で価値あるものに気付いていく能力と考える。物事を心に深く感じとる働き、感受性、外界からの刺激を受けとめる感覚的能力である。感性は物事を見抜いたり、価値観を考えたりするひらめきである。

(2)　心の表現をする

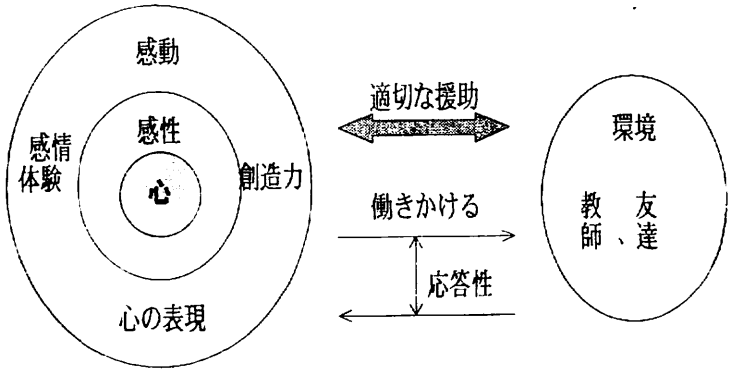
自分の内面にある事を、周りの人に伝えようとする行為である。表現されて始めて触れる事ができるものである幼児はまだ言葉が十分でないので、表情やしぐさ、身体の動きなどを通して表していく事が多い。

(3)　様々な感情体験をする

感情とは物事に感じて起こる気持ちである。外界の刺激によって外界に対する感覚や観念によって引き起こされるものである。生活の中で快、不快を味わいながら快感情の方向に行動ができるようにする事が望ましいと考える。

ア）　快感情…満足感、成功感、充実感

図１　豊かな心と人的環境（教師、友達）



イ） 不快－不安、恐れ、挫折、怒り、葛藤等

(4) 感動する

子供は本来、美しさ、不思議さなど感じとる力をもっており、それが直接体験を通して引き出されていくものだと考える。深い感銘を受けて強く心を動かされることが感動である。

(5) 創造する

今まで生活経験したものに、さらにイメージを重ね合わせ、新しい物を自分の考えで創り出すことである。

V 保育実践

1 活動名

ひっかき画を描く （スクラッチ）

2 活動設定の理由

(1) 教材観

クレヨンは2学期より頻繁に使うようになってきた。ひっかき画は一時塗りつぶして見えなくなったものが、また出てくる楽しさを味わえるものである。消えた時の「あれっ」と思う気持ちや、くぎでひっかくことによって出てくる不思議さや期待感がもてる。ひっかき画を通して「わくわく」するような気持ちと、プレゼントする喜びを引き出していきたいと考える。

(2) 幼児観

家庭や身近なところで、クリスマスに関することを見たり、聞いたりしている。園でもこのような社会の事象を楽しんでいる。子供達の話題は、やはりプレゼントのことである。自分がもらうと嬉しいと思う気持ちをサンタになりきることで、相手にあげる喜びを経験出来るものと考える。

同じ物を見たり聞いたりしても感じ方は一人ひとり違う。ひっきか画を仕上げるまでの間、絵本、友達との会話、壁面など、どの場面でもいいから心で感じとめるものがあると考える。

(3) 保育観

使い慣れたクレヨンではあるが、黒色を重ね塗りするのに時間がかかる。その間の友達との会話も大事にしたいと考える。会話する事でよりイメージが湧き、次に描くことへの期待感やプレゼントしたい気持ちが高まるように援助したいと考える。画板は友達とより関わりがもてるように二人で使うようにする。

ひっかき画に取り組んでいる表情、動き、つぶやきなどていねいに読みとり、受けとめるようにしたいと考える。

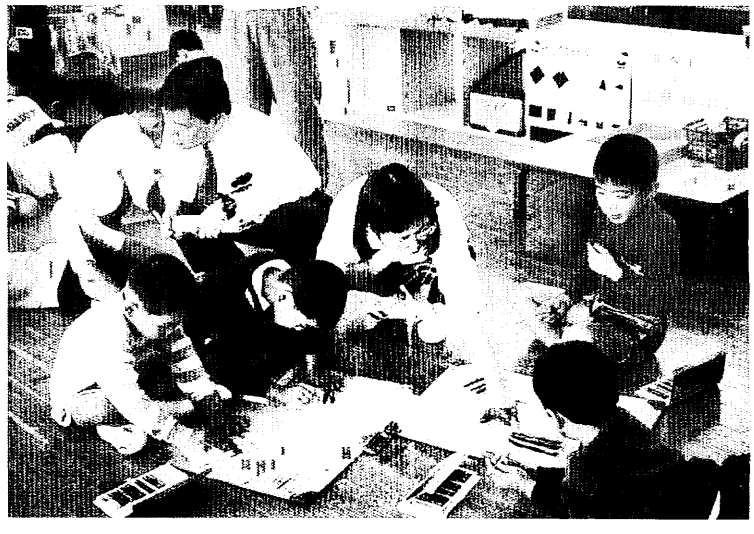
感動したことや見つけたことの嬉しさを、決して教師の押しつけでなく素直に表現出来るようにしたいと考える。ささいな感動の積み重ねが、心にため込まれていく事により、心の豊かさにつながるものだと考える。

3 ねらい

- ひっかき絵の不思議さを楽しむ
- プレゼントをあげる喜びを味わう

4 内 容

- 友達と一緒にひっかき絵を楽しむ
- サンタの気持ちになって、プレゼントしたい物をひっかき絵に描く



5　展　開

時間	幼　児　の　活　動	教　師　の　援　助
9:00	・集まる 手遊び ・絵本を見る 「さむがりやのサンタ」 ・プレゼントについて話し合う ・描き方について聞く 道具箱からクレヨンをとる 画板をとる（２人で１枚） 好きな色から塗りはじめる 黒色を重ね塗りする ・プレゼントしたい物を釘で描く ・やり直しのしたい子は絵を描き直す ・壁面にする ・貼りたいところに自分で貼る ・終えた順に片付けをする ホウキで掃く 雑巾で拭く	・静かに話が聞こえるように、座る位置など考えさせるようにする。 ・絵本から話を引き出し、サンタの気持ちになれるように話し合う。 ・プレゼントしたい物が決められるように声をかける「もしも、ばら組の皆がサンタになったら幼稚園に何をプレゼントする？」 ・クレヨンの準備にとまどっている子には一緒にやるようにする。 ・友達が見つからない子には誰となりたいか聞くようにする。 ・取り組みの遅い子には一緒にやるようにする。 （T男　A男　K男　L男） ・黒を重ね塗りすると、下色が見えなくなることに気付かせるようにする。 ・感動したところに共感する（表情、言葉、動き）。 ・様子をみながら曲を流す。 ・友達と話をしながら描く事が出来るようにする。 ・色が出てきた事に気付かせるようにする。 ・何をプレゼントしたいのか決まらない子には声をかけるようにする。 ・何回でもやり直しができることに気付かせるようにする。 ・描いたものを言葉でさらに引き出し、仕上げた嬉しさを認めるようにする。 ・壁面にしたい子は自分で貼っていくようにする。 ・早く描き上げた子には、床がどうなっているかを気付かせ、片付けを促していくようにする。 ・まだ描いている子もいるので、迷惑にならないように声をかけていくようにする。 ・クレヨンの細かいクズはどうすればいいのか、考えさせるようにする。 ・雑巾はしっかりしぼっているか、声をかける。
10:00		
評価	・　教師との信頼関係において、一人ひとりの発達を理解し受け入れていたか。 ・　ねらいと内容は、幼児の姿からして適当であったか。 ・　プレゼントしたい物を友達と伝えあっていたか。	

6　保育の反省

・　最近のK男は弟が生まれたということで、気持ちが少し不安定であった。なかなか取り組もうとしないので家庭でのことを聞いたり、肩をポンと叩いたりすると受け入れられている安心感があり描き始めた。一人ひとりにあった援助をすることによって気持ちが安定し、描く意欲につながったと思う。

- 壁面にしたプレゼントを見て自分が描いた絵を自慢したり、友達の出来上がりを認めたりする姿が見られた。周りの友達に自慢するという自分の充実感や満足感を味わってこそ、他の人も認める事が出来るようになると思う。
- 抽出児T男に対しては事前に関わりをもつことができたので、気持ちが安定していた。画板を一緒に使う友達も自分で見つけることが出来、嬉しさを素直に表していた。教師に受け入れられているという安心感が、描くことへの意欲になり、友達との関わりをもつことが出来たように思う。
- 抽出児S子は最近、友達を意識するようになってきたので、一緒に描く友達も自分で見つけさせるようにした。描いたり作ったりすることが得意なので、黙々と取り組むS子の良さを全体の場で取り上げ、認めたことが自信となり、描いた絵を積極的に壁面に貼っていく姿が見られた。

Ⅵ　実践事例

1　自分を素直に表現するH男の事例

H男、M男、S男はいつも一緒でH男はM男、S男に従って遊んでいた。
H男は家で作った紙ずもうを持ってきた。それを真っ先に見つけたK男は「おもしろそう、一緒に遊ぼう」　H男「…」　H男「いいよ」紙ずもうを置くダンボールを二人で捜し、遊び始める。イメージ豊かなK男が、おもしろおかしく解説をする。
K男「これから始めます」　ダンボールを叩くH男はにこにこして今までに見られない表情であった。
K男「もう一回始めます」　H男はダンボールの周りを歩いたり、手を叩いたりして嬉しさを体いっぱいに表している。
K男「これはすぐ倒れるから大きいのがいいなー」　H男はこれに答えるように大きいのを作る。
K男「お前って上手だな」　H男「そうだよ」　K男「動物も作れるか」　H男はまたも黙々と作り始める。今日の出来事を降園時に学級全体の場で取り上げ認めた。
－ 2週間後 －
いつもの3人組は、S男を中心にM男、H男が大型積み木で船を作っている。S男はいつものように「あれを持って来い」H男「…　」今日のH男は不機嫌である。H男「船を作るのはいやだな」
H男「俺、命令ばっかりされるのはいやだ」　M男とS男は突然の言葉に驚いた様子であった。
H男「もう遊ばない」　M男「俺だっていやだった」それを見ていた周りの友達も「S男はいつもいばっているからだよ」　「そうだよ」　S男「何でいいさ－」と強がりを言っていたが、遊びが中断したので他の遊びに移る。H男はS男の心配をしながらも、自分を素直にだしたことで嬉しそうだ。

考　察

- 手先の器用さを認められたことと対等に遊ぶということが充実感を味わい、H男は自分に自信がついたと思われる。いつもと違うK男との関わりの中で、H男の良さが引き出されたのではないかと思われた。
- S男は今まで自己中心的だったのが、H男の「いやだ」の言葉に、他の存在を気付くようになり周りの友達をだんだん受け入れるようになってきた。やはり友達との関わりの中で感じたり、気付いたりしながら人としての付き合い方を知っていくようになると捉えた。
- H男は自分を素直にだすことで表情も明るくなり、その後は、友達の中でやりたい事に対し、少しずつではあるが言おうとする態度が見られるようになってきた。

2　直接体験を積み重ねることの大切さを知る事例　Ⓣ 教師

K男が虹を見つけ急ぎ足で知らせにくる。　K男「とってもきれいだよ」　T男「一緒にいこう」外に出るとまだうっすらと残っていた。　Ⓣ「きれいだね」　見ていると6～7人集まってきた。皆がきれいだと声をあげているなかで、E子だけはまったく表情もかえず、その場からいつの間にかいなくなった。

－　その一ヵ月後　－

E子「先生たいへん　虹見つけたよ」　Ⓣ「どこ？」　E子「きれいだよ」　E子「あれは　虹っていうんだよね」　Ⓣ「そうだよ」　E子「ほら－　ずっとまえにK男が見つけたのと同じだよね」　Ⓣ「そうだよ」　E子「よかった」

E子は自分で虹を見つけたことと、周りの友達にも声をかけられたことが嬉しそうであった。

考　察

- E子は一見すると、無表情のように見えたが実はそうではなく、K男の言葉に共感し、その場の雰囲気を感じとっていたことに気がついた。
- E子のように心の中でしっかり感じていることを、必ず表情や言葉で現すとは限らないことがわかった。心の中を読みとることのむつかしさを、さらに感じさせられた。
- 日常生活の中で「虹がきれい」と見つけた時の嬉しさを共有する友達や教師がいたことで、嬉しさが倍増されたと思う。このように感動した時に誰かに伝えたくなるような心動かされることの積み重ねが、心の豊かさにつながるのではないかと思った。

3　ありのままの姿の中からS子の気持ちをていねいに読みとる（内面理解）ことの事例

（幼児の姿）◉S子　※他児	（＊教師の読みとり　◇援助）	（変　容）
◉S子は皆が跳び箱を跳んでいるのをじっと見る事が一週間続く	＊やりたそうに見えるがそのまま様子を見守る。S子は教師を見る。	見る ↓ 側に行く
◉跳び箱の側にじっと座りこんで跳ぶ様子を目で追って見る。	◇S子は再び教師を見る－見守る。 ◇離れた場所から跳び箱の側にきたので跳びたいのだと捉えた。	↓ 信頼関係 自分の存在を主張
◉Ⓣ「跳んだら」S子「いやだ」	◇「いやだ」意思表示をする。 ＊教師もS子の側に座る　教師が必要。	ちょっかいを出すことによって友達と関わる
◉跳び箱の側に立ち、並んでいる方角を見ながら手を出す。 ※「じゃま」「どいて」と跳んでいる友達から文句を言われる。 ※跳ぶ人にかかったわけでもないが一時中断する。 ※皆の一方的な言葉に、S子は黙って受け入れる。S子の気持ちがわかったようである。 ※S子に「跳んでいいか」と聞く ◉「はい　どうぞ」と声にだし、手でも合図をする。お互いの気持ちが通じ合い遊びが再開した	＊手を出すのは次の人跳んでの合図のようである。より友達と関わりたいことがわかった（S子の表情や行動）。 ◇Ⓣ「跳ばないんだよね」S子「うん」 ◇邪魔になってない事を周りの子にも伝える。 ◇どうすればいいか周りの子を集めて話し合いをやり、納得させた。 「Sをもとべばいいのに」「かからなければいいよ」と励ましている。	↓じゃまと誤解さ 安心感　れる ↓わかってもらう 嬉しさ ↓受け入れられた 場の共有 ↓ 声にだして言う ↓ 満足感 ↓ 充実感

考　察

- 一見すると邪魔にみえる行動だが、S子の本当の気持ちは友達の中に入りたいことがわかった。
- S子の姿を教師がどのように読みとるかによって、援助していくことにも大きく関わり、子供一人ひとりの内面をていねいに見ていくことの大切さに気付いた。

4　友達と十分に関わり、友達のやさしさに気付いていくY男の事例

S男とY男はいつもいっしょにおり遊ぶ様子をみると、Y男の言うがままに満足しているところがあった。運動会近くになり、周りの友達と走っているといつの間にかS男に対しても競争意識をもつようになってきた。運動会の学級対抗リレーで絶対アンカーになりたいと強い思いがある。学級全体に反対され、葛藤しながらも自分の思いを必死に訴えていくY男の変容を追ってみた。

（Y男の姿）　10月中旬〜10月下旬	◇（他児との関わりと教師の援助）＊	（教師の願い）
S男がアンカーやるんだったら俺もやる ↓	◇S男とだけ走る。	・Y男以外の友達とも関わってほしい。
友達と毎日走る　走る心地よさを味わう ↓	◇周りの友達から誘われる。	・感情を素直に出せるようにしたい。
友達に負けるとくやしがる　感情をだす ↓	＊教師も一緒に走る。	・自分の興味をもったことに対して集中してほしい。
友達や教師に何度もリレーの挑戦をする ↓	＊負け、遅いと言われくやしがる。くやしさを素直に訴えるので受け入れる。	・負けるくやしさを心で感じ乗り越えてほしい。
登園すると自発的に何回も練習する ↓	皆でアンカーを決めよう	
負けたくやしさで家でも練習をする	◇周りの子もY男から誘われると喜んで走る。	・最近やっと自分の思いが言えるようになってきた。アンカーになりたい気持ちを押さえることなく主張してほしい。
やりたくて真っ先に手をあげる　↓ ジャンケンで決めたい 走るとまける不安がある ↓	主張 葛藤 他児との衝突 ＊決める方法を話し合う。くじ　あみだ　ジャンケン なかなか決まらず何日も持ち越す。	
ジャンケンがいいと真剣に言う ↓	＊Y男のなりたい気持ちの訴えを受け入れる。	・Y男の気持ちを学級の仲間が聞いてくれた事に気付いてほしい。
希望の人が競争をして決めることに決定 その続きはまた明日にしよう ↓	◇Y男の真剣さを学級全体が一応は受け入れるが、ジャンケンには納得しない。	
大多数の中でY男とS男が残る　勝った方がアンカーになることにYは反対する 皆の中で競争をする　S男が勝つ Y男はくやしくて泣きそうになる Y男は念願のアンカーになり嬉しそう	◇「そんなになりたいならお前に譲るよ、だから頑張れよ」 ◇「思わず皆が拍手する」	・Y男は、S男が譲ってくれたことや、拍手をしてくれる周りの友達のやさしさに気付いてほしい。

考　察

- Ｙ男は今まで自分の思いをなかなか言わなかったが、運動会をきっかけにして主張するようになってきた。Ｙ男や学級全体の言い分を納得のいくまで受け入れるには、十分な場や時間の保障をしていくことが大事であると思った。
- Ｙ男は自分の思い通りにいかないという経験をすることで、相手にも考えがあるということに気がついたようであった。
- Ｙ男の真剣な気持ちを何日間もかけて話し合えたのは、周りの友達のやさしさや学級の雰囲気があったからだと思った。Ｙ男も関わる中で周りのやさしさに少しづつ気付いたようである。

Ⅶ　研究の成果と今後の課題

1　成　果

豊かな心

- 感性を育てるということは、感性そのものだけが伸びるのではなく、いろんな要素が絡み合って育ちを促していることがわかった。

援助

- 事例２では、Ｅ子の変容を見ていくと心の中に確実にため込まれているものがあることがわかった。ため込まれている間は内面をつかんでいくのはむつかしくあせりがちになるが、子供の気持ちに寄り添い、見守ることが大事であると捉えた。
- 教師は幼児を取り巻く環境の中で、重要な位置にある。子供の感動の場面や言葉にいかに気付き、共有していくかは、教師の感性に大きく左右されるものである。

発達

- 幼児が日常生活の中でさまざまな事物や事象に出会い、体験を積み重ねていく事は、発達に必要な経験であることがわかった。
- Ｙ男のリレーをやりたいという気持ち、Ｓ子の仲間に入ろううとする気持ち、この伸びようとする姿が発達である。一人ひとりの発達を捉えるには、あるがままの生活の中でていねいに読みとることで見えてくるものであることがわかった。一人ひとりの発達を理解することのむつかしさを感じた。

友達関係

- 人と人との関わりが豊かになっていくには、まず自分が充実し満足することである。そうすることにより、友達を受け入れたり、認めたりするようになり「友達っていいな」「友達に伝えたい」と思うような気持ちが人と人との関わりの豊かさではないかと捉えた。
- 人との関わりはすぐうまくいくものではなく、葛藤や感情のコントロールも人との関わりの中で育ち培われていくものである。日々の生活の中で関わる場面がいかに大事であるかがわかった。
- 育ち合う友達関係は、自分が受け入れられていることを基盤とし、友達といる楽しさ、自分が役立った実感などを通して育っていくものであることがわかった。

2　課　題

- 一人ひとりの内面を理解することの大事さはわかったが、すべて理解することはあり得ない事かも知れない。しかし、理解しようとする姿勢、努力することを大事にし、今後も保育をしていきたい。

〈参考文献〉

文 部 省	『幼稚園教育指導書』増補版	フレーベル館	1989年
小田　豊	『一人ひとりを育てる』	ひかりのくに	1994年
柴崎正行	『幼児の発達理解と援助』	チャイルド本社	1992年
文 部 省	『幼児理解と評価』	チャイルド本社	1992年
岸井勇雄	『表現Ⅰ　感性と表現』	チャイルド本社	1990年